

## 卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和元年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	長崎大学	整 理 番 号	1 8 1 4
プログラム名 称	世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム		
プログラム責任者	北 潔	プログラムコーディネーター	有吉 紅也
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本プログラムには、令和元（2019）年 11 月時点で 28 名の大学院生が参加しており、うち半数は海外からの留学生である。ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（LSHTM）との Joint PhD Degree Programme(JD)の入試倍率は 2018 年度 2.6 倍、2019 年度 5.6 倍と、一定の倍率が確保されている。本プログラムの博士後期課程の学生の中には、すでに QE を通過して国際共同学位取得に向けての研究を開始した者も含まれる。また、LSHTM の教授 2 名、准教授 1 名、助教 3 名をクロスアポイントメントで雇用し、LSHTM の一部教員が長崎大学に滞在して講義を実施している。2019 年 3 月には LSHTM と合同で大規模なキックオフシンポジウムを開催し、9 月には LSHTM Week に長崎大学教員や日本企業が参加した。講義配信システムやテレビ会議システムなどの機器及び学生のスタディールーム等もすでに整備されている。これらの点から、総じてプログラムは着実に開始されている。</li> <li>・他の卓越大学院プログラムの担当者が本プログラムを兼任していることについては、両プログラムの内容的関連が強いことからむしろ相乗的効果が期待される。</li> <li>・LSHTM の講義と同等レベルの講義ができるよう長崎大学の教員をレベルアップするという点については、既に講義や学生指導における両大学教員間の交流が進展している状況にあり、LSHTM の FD 受講等も予定されているが、引き続き課題である。</li> <li>・検証可能かつ明確な目標の達成状況については、10 月入学のため、平成 30 年度は数値目標に達していない項目が多く見られたが、初めての年次進行を迎えた 2019 年 10 月からの年度において多くの項目が明確に改善することが見込まれる。ただし、例えば「国際共同研究」など目標値の定義が曖昧であるものについては今後、定義を明確にしプログラム内で認識を共有した上で達成に向けた取組を進めることが望ましい。さらに、現在は目標として設定されていないが、プログラムの内実を示すうえで他にも重要な事項（例えば学生の海外フィールド及び LSHTM への派遣数など）が考えられるため、今後はそれらも含めて実績を把握していくことも期待される。</li> <li>・支援対象学生との意見交換からは、面会した学生の多くが本プログラムの趣旨を理解しており、意欲も高いと感じられた。他方で、経済的支援の仕組み等、プログラムの詳細な仕組みについての情報が少ないこと等に対して不安を感じていることが見て取れた。</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>【大学院教育全体の改革への取組状況】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・熱帯医学・グローバルヘルス研究科（TMGH）以外の研究科から本プログラムに参加する教員や学生の範囲が拡大しているという点では、例えば LSHTM の優れた教育研究のあり方が他研究科の学生も含めて広報され、学内でも十分認知されている状況にあると言える。今後は、本プログラムを構成する具体的な仕組み（他大学との連携による教育プログラムやチーム型研究指導など）が、他研究科にも波及していくような取組が望まれる。</li> <li>・全学的な大学院改革につなげていくための大学全体としての組織体制はかなり整備されており、教員の所属組織を従前の学部・研究科から三つの学域に大括り化する</li> </ul>			

などの基盤整備は一定程度進んでいることから、今後の着実な進展が期待される。

## 2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- 本プログラムの中核は LSHTM との密な連携にあるが、学生の教育研究や教員のスキルアップなど本事業の取組成果を明確にする観点からも、LSHTM の研究や指導方法の何がどのように長崎大学（あるいは日本）の大学院よりも優れており、また、連携によってどのような効果が長崎大学にもたらされるのかについて、明確かつ具体的に示すことが期待される。
- LSHTM との連携の有効性をよりわかりやすく示すためにも、単に LSHTM が優れているということに留まらず、LSHTM が公衆衛生学とアフリカ地域の研究に、長崎大学はラボ研究とアジア地域の研究に重点を置いているという両者の違い・相補性が、本プログラムにおける教育研究においてどのように卓越性をもたらすのか、具体例を明示することなどにより、対外的にアピールしていくことが望まれる。
- 本プログラムは LSHTM のシステムや用語を多く採用しており、中には、例えば一つの科目を表す際に使う「モジュール」のように日本での一般的な用例と異なる用語も含まれる。外部からの誤解を招くことのないよう、それらの具体的な定義や説明（たとえば学生が履修するコマ数、単位数、授業数など）を、外部にもわかりやすい形で提示していくことが望ましい。
- 上記以外にも、本プログラムを通じて大きく広がることも期待される参加学生の将来のキャリアルート、首都圏での人材開拓の拠点としてのサテライトキャンパスとの関係、産学連携により獲得が期待される外部資金など、優れた取組が行われている、もしくは予定されていることがうかがえるにも関わらず、書類等や現地視察における説明では、その具体的な内容が十分に明示されていない事項が見受けられる。今後、本プログラムの進捗状況を適切に把握していく上で必要かつ有用な情報が十分に提供されるか懸念があることから、プログラム関係者において本プログラムの長所を十分に認識共有し、対外的に積極的に示すことができるよう整理していくことが望まれる。
- プログラムの仕組みが複雑であり、履修生の入れ替えを行う「受講更新」のように学生同士の競争も組み込まれていることから、学生の不安が過度に大きくならないよう、十分な情報提供や支援などを拡充していくことが求められる。
- 世界レベルの教員の雇用や学生の教育研究支援経費などで継続的に予算が必要となる。産業界からの寄付や共同研究収入など外部資金獲得を含め、事業継続の資源確保について、大学としての具体的で説得力ある計画の策定と提示が望まれる。